

浄土

monthly
JŌDO

October 2000

10



21世紀もしやべつたる。

OK!

市外も、国際も、
インターネットも、
携帯も、
日本テレコム。



●お問い合わせはお客センターへどうぞ ☎0088-82 (無料) (受付時間) 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ <http://www.japan-telecom.co.jp/>

浄土

2000/10月号 目次

目次	1
講演概録「法然の魅力」	阿満利磨 2
懐かしき玩具	芝崎慶三 13
木綿住生	門脇允元 14
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子 18
列伝 大野法道上	宮林昭彦 26
響流十方	小村正孝 32
連載 つぼ庭日記	近藤啞々砂 36
MUSIC REVIEW	40
コラム「浄土宗と浄土真宗」	42
Jフォーラム	43
浄土誌上句会	選者増田河郎子 44
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし 47
編集後記	48



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影＝芝崎慶三

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然の魅力

【講演概録】前編

明治学院大学国際学部教授

阿満利磨

法然上人のお人柄も大変すばらしいですが、何といっても法然上人が発見された「専修本願念仏」という、この信仰がすばらしいのです。どうしても今の人間は、法然上人の生き方とか、あるいは親鸞聖人の生き方とか、それぞれの人格のあり方について、いわば小説を読むような興味で関心をお持ちになることが多いのであります。また、そういう議論が多いのであります。けれども大事なことは、あくまでも法然上人がすばらしい宗教を我々の前に提示してくださった。だから、我々が讃仰するのは、その教えを讃仰するということが基本でなくてはいいけません。本当は阿彌陀仏を讃える会というのを開かなくちやいけないんだけれども、阿彌陀仏を讃える会だけでは手がかりがなさ過ぎますから、法然上人を、あるいは親鸞聖人ということになるのでありましようが、どうぞ、法然上人によって開かれた仏教が大変すばらしい、魅力があるんだという、その一点だけは大事にしたいだきたいと思うのであります。

申し上げるまでもなく、ほとんど同時代の人は、法然上人がどういうすばらしい仏教を発見されたかということ、ちゃんと紹介しておられるのです。私はその人に従って、法然上人の仏教と法然上人のすばらしさをお伝えしたいと思ひます。それはどなたかという『徒然草』の兼好法師なんです。兼好法師という人は、法然上人の仏教というもの、あるいは法然上人のお人柄というものをよくよく見抜いていた人だと思ひます。

その『徒然草』の第39段に、法然上人について三つのことを引用しているんです。その三つが、私から言わせると、法然上人の仏教の本質だと思ひます。

どういふことかといいますと、あるとき法然上人のお弟子が、お念仏をしなくちやいけないうんだけど、お念仏のときに眠たくなつてお念仏が口について出ないし、あるいはお話

を聞くことも難しい。どうしたらよからうかということを経上人にお尋ねになった。そしたら、法然上人が「目が覚めている間に念仏したらいいだろう」とおっしゃった。兼好法師は、「いと尊かりけり。」と書いています。

私は、すばらしいと思います。法然上人が「眠たいときには我慢することはないんだ。目が覚めて機嫌のいいときにお念仏をすればよろしい」と言っていることです。これはすばらしいことなんです。こういうことを言う宗教家はいません。多くの宗教家は、「そういうときには水でも浴びて気を取り直して話を気なくちゃいかん」とか、「一所懸命行をしくちゃいかん」と言うものなんです。と

ころが、法然上人はそういうことは一切おっしゃらない。およそ苦行ということについて、法然上人は全否定です。

不思議に思うのですが、日本人は宗教というと何か苦行をしなくちゃいかんという、非常におっかないところがあるのです。神様や仏様とコミュニケーションをとるためには、人間の側がそれ相当に努力を重ねて、神様や仏様に許してもらえようという信心をもった体や心にならなくちゃいけないという考え方が、ずっと昔からあるんですね。

もっと平たく言えば神さまと佛さまと人間がギブ・アンド・テイクの関係なんです。人間のほうは、これだけの努力をしたから、それとの見合いでいろいろに祈願を聞いてくださるのだというふうに普通は思うわけです。しかし、法然上人の仏教はまるで違ふんです。人間のほうは仏様に約束をする必要もない、何も差し上げる必要もない。いつも申し上げ



ることですが、熊谷次郎直実という法然上人の三番目のお弟子さんは、法然上人の門をたたいたときに、自分の腰の刀を取り出してゴシゴシと研ぐということをした。周囲の人は、法然上人に会いに来たのに、刀を研ぐというふうな恐しいことをする。一体これはどうなるんだと聞くと、次郎直実は、「自分は武士でたくさんの人を殺してきた。たくさんの人を殺してきた人間が救われるという宗教がもしあるとすれば、お前の腕の一本、指の一本も切つて差し出さない、そのかわりにあなたを救つてあげましよう、きつと言われるはずだ。だから、自分は指や腕を切るのに痛くないように、よく切れるように、こうして刀を一所懸命研いでいるんだ」と、こういう話をした。いよいよ法然上人に会つて、「自分のような罪悪深重の人間が救われるには、どうしたらいいですか」とお尋ねしたら、法然上人は「あなたの罪の軽重は問わない。一切問題ではないんだ。ただ本願を信じて念仏申すことで救われるのだ」とおっしゃられた。そこで感激屋の熊谷次郎直実はおいおい泣き出したんです。号泣したのです。法然上人がびっくりされて、

「どうして、おまえはそんなに泣くのか」

「自分のような悪人が救われるには、それ相当の代償を出さなきゃいけないと思つていた。きつと腕の一本、指の一本を切り出せと言われるに決まってると思つていた。しかし、何とおまえの罪悪は一切問わない。おまえがいかなる悪人であるかということとは問わない。ただ阿弥陀仏の本願を信じて念仏せよ、それが救いなんだと。こんなうれしいことがあるのかというので、こうして涙が出ています」

こういう有名な話があるわけです。

自分が救われるのだったら、それ相当のあがないをしないとだめなんじゃないかと思つ

ていたところ、法然上人がそれを問わないとおっしゃったんです。これはなかなかの教えなんです。こういう話をいたしますと、中学生でも感動するんです。ましてや皆さんはもっと感動していただけるでしょう。あるとき、この話を中学生にしたら、「あなたはいろいろ難しい話をされたけれども、熊谷次郎直実の話はよくわかりました」と、中学生がそう言う。中学生の心をもつかむことができる教えなんです。法然上人は何とすばらしい方かということになります。

念仏というと、日本人の間には、お葬式のとくに死んだ人の前で念仏をするというのが一般的なんです。しかし、法然上人の念仏というのは、同じ念仏であっても死者のための念仏ではない。死んだ人の鎮魂慰霊のための念仏ではなくて、自分がどのようにして救われていくのかという、自分のための念仏なんです。

自分のための念仏、つまり阿彌陀仏の本願を信じて念仏を申すという教えでございます。法然上人の仏教は、それ以外のことは一切問わないというところがすばらしい。法然上人にある人が、「お酒を飲むのは罪でありましょうか」と尋ねたら、法然上人は、「まことに飲むべくなくけれども、この世のならい」と言われた。「飲んでいろいろ悶着を起こすことがあろうから、飲まんほうがいいかもしれない。しかし、この世のならいで仕方がないことです」とおっしゃったんです。普通の宗教家であれば、「酒などはやめたほうがいい」と、きつとおっしゃったかもしれない。先ほどの「眠たいときは無理するな」と同じです。お酒が飲みたい。飲みたければしょうがない。つまり、宗教というのは、普通は酒を飲んじやいかんとか言うけれども、法然上人は「好きなものは好きなんだ。それはやむを得ない」と。

法然上人のお書きになったお手紙を読みますと、しょっちゅう「力及ばず候」とおっしゃっています。例えば法然上人の教えに大変感動して、親しい者にも法然上人の教えを弘めたいと思う人たちがいて、法然上人に手紙をよこしてきます。幾ら自分がすばらしいと思って、ほかの人々にそれを教えようと思っても、ほかの人々はなかなか「うん」と言わない。ですから、何とかほかの人に信心させたいけれども、どうしたらよろしいでしょうかと相談してくると、法然上人は、幾ら教えても、勧めても、縁ある人はすぐすばらしいとわかるかもしれないけれども、縁の遠い人に無理に信じさせようということは阿弥陀さんでもできないことである。「力及ばず候」と。

あるいは当時は法華經という經典が大変力を持っていた。ですから、法然上人の念仏もすばらしいけれども、世の中で一番評価の高い法華經というものも念仏とあわせて大事にしたいが、どうでしょうかということに法然上人に尋ねると、法然上人は、阿弥陀仏の本願第十八願に、法華經を読んだり、書写したり、持っていたりしなくちゃだめということはどこにも書いてない。ただひたすら念仏だけする者を迎え取ると書いてあるだけだから、法華經を大事にするということとは必要なんだ。しかし、あなたがどうしても大事だと思うなら仕方がない。私は「力及ばず候」と書いてある。

この「力及ばず候」というのは、法然上人の仏教で非常に大事なところなんです。なぜ法然上人が「力及ばず候」という言い方をされるのか。あるいは苦行を問題にせず、ただひたすら信じて念仏するということだけを主張されたのか。

これは私どもが阿呆な存在だからです。我々が自分で自分を救う力があれば、苦行も必要です。苦行も有効性を發揮する。しかし、我々は苦行ができそうで、実はできない。例

えば、これから3年間、毎朝6時5分——6時じゃなくて6時5分に起きなさいと言われたら、どれだけの人が続けられますか。三日坊主と言いますから、恐らく3日間ぐらいは続くかもしれない。4日目ぐらいから「何で6時5分に起きなくちゃいかんのか」ということになって、こういうことは続かないものです。大体こういうことをして何になるんだろうかというふうに考えるのが、我々の大事なところですよ。つまり伝統的な言葉で言えば、私どもは凡夫だからなんです。苦行ができないのは、苦行をやり通せないのは、我々が凡夫だからなんです。

凡夫という言葉は今では死語ですが、凡夫というのは阿呆を本質にしている人間のことで。普通、我々は自分は平生は賢くて、ときどき阿呆をしでかすと思っているわけです。しかし、法然上人が、たまに賢いことはあるが阿呆を本質にしている、それが人間の本質だということをおっしゃったというのは、法然上人のすばらしいところなんです。ですから、阿呆の最たるものは、自分が阿呆であることを知らないということなんです。自分が賢いと思っているのが最も凡夫たるゆえなんです。自分が相当阿呆であるなということ、少し見えてきていることは、既に阿弥陀さんの力をかりていることなんです。

法然上人をして「力及ばず」と長嘆息させた凡夫という人間のあり方の本質というものを、いろいろと探っていきますと、凡夫というのは自分で自分を裏切る存在なんです。私どもは、日々の暮らしの中で絶えず自分を裏切って暮らしているのであります。自分で自分を裏切ったことがないという方がいらっしゃれば、それは仏様です。我々は何かにか自分を裏切って、自分をこまかして何十年か生きてきて、またこれからも生き続けるわけです。いろいろと弁解をする術は発達しておりますから、自分で自分を裏切ったというこ

とても、裏切っているということ自体も感じずに、ちゃんと生きていくだけの智恵も備わっているわけであります。

現代の多くの人たちは、自分がだれだという考え方を持つことができない。自分が偉いということについては幾らでも自信が持てるけれども、自分は大した人間ではないんだ、阿呆な存在だということを自覚するというのは難しいんです。これは法然上人の時代と現代との一番大きな違いです。法然上人のお手紙を読んで驚くのは、自分たちのような愚かな人間でも、この仏教で救われていくんですよと、必ず自分のことを「愚かな者でも」というふうに形容している。今の人間は、自分で「自分のような愚かな者」ということはだれも言わないですね。私のようにちゃんと生きてきて、それ相当の考えを持った者から見れば、法然上人の仏教なんてちゃんちゃらおかしいと言うわけです。えらい違いです。

夏目漱石の小説の中には、世の中に悪人という人はいません。善人が突然に悪人になるから恐いんだということを書いてあるということ、いつでもお話しいたします。善人が突然悪人に変わるというのは、善人だと思っている人の中にどういう因縁が働くか、縁次第で我々はこういう生き方をするかわからんということを示しているわけです。そういうことは、ニュースで出てくるいろんな恐い事件の犯人について、周囲の人たちにうわさを聞くと、立派な人だ、大人しい人でしたよとか、いろいろ申します。それは我々が自分で自分がわからなくて、突然変わるんです。変わるのはあの人で、私は変わらないと多くの方は思っておられるでしょう。私も思っているんです。自分は変わらないと思っています。しかし、変わるのです。

そういうふうに、我々は一寸先は闇という存在ですから、自分の力で自分を救うという

のは、どうしてもできない。そういうことが身にしみればしみるほど、阿弥陀仏の本願という、法然上人のおっしゃった「他力」ということによつてしか救われていけないことが、身にしみてわかつてくるんです。ですから、「他力」というものがわかるためには、自分が自分を救うことはできないという思いが十分に出てきていないと、なかなか難しいことです。しかも、先ほど申し上げたように、凡夫というのは自分で自分を救うことができないということは、なかなか思えない存在なんです。よほどのことがないと自分は阿呆やと思えないんです。だから、「他力」という信仰はやさしいのだけれども、なかなか難しいと言われるのは、そういうことも含まれてくるわけです。

法然上人は苦行ということを否定された。苦行によつて救われることはできないということをお教えられた。同時に、もう一つ大事なことは道徳によつても救われていくことはできないんだということをお教えられた。もちろん十三世紀という時代は、道徳とか宗教という言葉はありません。道徳という言葉も、宗教という言葉も、明治以降につくられた日本語でありますから、当時はそういう言葉はない。しかし、今から思えば、法然上人の説く宗教というものは、苦行によつて人間は救われないということと同時に、道徳によつても救われないということをおっしゃっているのです。

世間は道徳で成り立っているわけです。しかし、今申し上げたように、我々のあり方ということをよく見極めてみると、因縁によつて縛られている存在でありますから、道徳を守るということは容易でないということも、またわかつてくるわけです。善人としている人な人に褒められて暮らしていきたいと願つて、現に暮らしているけれども、思いもかけないことがあつて、ほかの人からの叱責を受けざるを得ないようなことも生じるわけです。

道徳的に善人であり続けるといふことは、凡夫にとっては大変難しいことです。しかし、それでも凡夫というのは善人であろうと努力するものなんです。道徳の問題というのは、自分はいつも道徳的に安全地帯にいるものだと思いがちであります。道徳的に過ちを犯すのはあの人であつて、私は道徳的に過ちを犯すことはない、普通はそう思つて暮らしているわけです。しかし、今申し上げたように、善人は突然悪人になるということが、また人生の真相なんです。ですから、生涯善人としてお暮らしの方は、法然上人の仏教と縁がなくて終わられるかもしれない。それはめでたいことであります。しかし、我々は毎日暮らしているうちに、どうしても自分を裏切つて、善人であり続けることができないことがあるわけがあります。

道徳の世界で十分に道徳的に満たされて暮らしている人は何とも思われなけれども、一たび道徳に破れた人間にとれば、道徳の先の救いの世界がなければ、これはもう生きていけないですよ。ですから、宗教というのは、道徳に破れて初めて見える世界と言つてもいいかもしれない。道徳というものの、善悪というものに破れてもおかしく救われる世界がある。これは悪人にとっては大変な救いです。そうでなくちゃ、自分の人生は何のためにあつたのかということになつてしまふ。

法然上人の仏教というのは、先ほどの熊谷次郎直実の例のように、たくさんの人を殺してきた武士であつても、その武士が一たび救いを求めてきたときに、その罪の軽重は問わないと、きつぱり法然上人はおっしゃつた。これはすばらしいことです。おまえがどれだけの善を積み、どれだけの悪を犯してきたかということをおまへは地獄行きであると。これははかりを設けて一々問われて、悪のほうに傾いたからおまへは地獄行きであると。これは

若いときはそんな話を聞いても何とも思わないけれども、だんだん何か向うの風が強くなつてくると、それはなかなか深刻な話であります。そういう意味で、法然上人のすばらしさは、道徳の世界を超えたとこに成立している。

もう一つは、道徳の世界や苦行の世界を問わないということは、少し話が飛びますけれども、カリスマという人間のあり方からは遠い宗教なんです。つまり、法然上人の仏教というのは、阿弥陀仏の本願を信ずるということが中心である。それを信じたら、どんな人間でも救われるというのが法然上人の仏教であります。条件がないんです。一切無条件なんです。ところが、普通の日本の宗教では、特別に苦行し修行して、世間で言う靈力のあつる偉い方の力をかりて救われていこうとする。道が違ふんです。ですから、「最高ですか、最高ですか」というような話に引きずり込まれると、たくさんのお金を投げ出して教祖という人の力によつて救われていこうとすることが起こつてくるんです。でも、法然上人の仏教は、そういう特別の靈力のある人の力には必要なんです。これはすばらしいことです。ひよつとしたら世界じゅうの宗教で法然上人の仏教だけかもしれません。

阿弥陀仏の第十八番の本願という法によらずに、特別の靈力を持つてゐる人の力によつて救われていくという宗教は、その靈力のある人のいわばわがままによつて、自分の大事な人生を左右されてしまう。しかし、法によつて救われていく宗教は、法を信じるか信じないか、それだけが問われる。そこに大きな違いが出てくるわけがあります。(つづく)

懐しき玩具

撮影

芝崎慶三

相撲の遊びは古くからあります。

初節句を迎える男児に相撲人形を贈る風習があるのは熊本。角界の元締、吉田司家がある土地だけに相撲が盛んだったのです。土人形から型をとって張り子製に変えたものが残っています。

大阪相撲が盛んな頃は、四股名入り和紙の紺色禪をした力士一對を取り組んだ形に向かい合わせて吊るした相撲人形が大人気。手で動かすと相撲をとっているように見える玩具です。

板の上にのせ板を叩いて勝負するタイプは四天王寺の境内で売っているのが有名でした。

桐の薄板二枚で両力士を作った板相撲、弾き相撲は明治中期まで春夏両場所の国技館前、露天で売られていたといえます。

木綿 往生

外村吉之介先生のこと

門脇允元

日本民芸協会常任理事

それは、昭和六十一年九月二十七日にさかのぼります。そのお方は、倉敷民芸館長の外村吉之介先生です。

その日、先生は満八十一歳のお誕生日を迎え、二百人ほどの方が全国から倉敷国際ホテルに集まり、先生がとくに愛された沖繩の方々の歌や踊りでお祝いしたのです。祝辞は知事さんが、世界の優れた民芸を紹介した功績と、自宅を開放して本染手織の技術伝承指導に挺身された生涯、さらに倉敷の町並保存に尽くされた功績が讃えられた。そして沖繩、芭蕉布の人間国宝・平良敏子さんは、第二次大戦中、挺身隊として倉敷紡績にきていて、終戦を迎えた灰塵と化した沖繩に帰れず困り果てていたのを、倉敷紡績の社長大原惣一郎氏が沖繩の復興につながる技術は芭蕉布などの染織がいいと日本民芸協会創立者柳宗悦氏

に、その指導者の推薦を求め、一家をあげて福井県から移り住んだ外村先生がその任に当たりたいきさつと、先生と生徒の域を越えた愛情と信頼の篤い関係はいまも変わることなく親子のようであると述べられ、会場はしばらくシーンと静まり耳をそば立てて聞きいつていたのです。そのあと私も祝辞を述べましたが、お二方のお話があまりに感動的で、何を申し上げたか全く覚えておりません。

宴が終わりに近づいたとき、外村先生は司会の方に、「ひとこと、お礼を述べさせて下さい」と申し出られ、淡々と、しかし一言のムダもなく、ご生涯のお話をなさいました。

それは、先生が牧師をしてもらったとき、柳宗悦先生の『工芸の道』を読まれて、人間の生き方を具体的に学ばれ、木綿のように人びとの生活の中で役立つ人間になろうと染織

の道をえらばれたこと。木綿は肌着に適し、おむつになり、最後には雑巾になってバケツの中で揉まれ絞られ汚い所を拭き、ボロになって往生いたします。河野先生という方の詩を引用され、

困った時に思い出され

用が済めば忘れられる

ぞうきんになりたい

と話され、道元禪師は雑巾を浄巾と称せられたことにふれ、キリストは伝道と治癒の生涯の終わりに十字架に架けられ、罵られ辱しめられ苦しみの死を遂げられ、その死によって万人の罪を浄める贖いを全うせられました。まさに浄巾の姿であります。

と、神との出会い、柳先生との出会い、ひとびととの出会いに感謝されたのでございます。

宴が終わり、先生は見送られ車イスでご退場されたあと、お世話の方々にも私も礼を述べて、「さき程の先生の謝辞は録音をとっていましたか」と伺ってまわりましたが、そのような手配がなされていないのでした。

仙台に戻ってから、あの浄らかなお姿とお話は、ぜひ後世に残したいものだと思ひ愧の念が止み難く、東京で映画製作をしている友人に、つい話したところ、その時の状況を再現してもういちどお話を頂ければ録画しようとなったのです。

私はすぐ電話で、私の心情を訴え、当日およばれされなかつた友人達に、もういちどお話をしていただけてませんか、失礼千万なことを申し上げてしまったのです。

「いんげんさん、その心配はいりませんヨ。あれ程盛大なお祝いをして頂いたのですか

ら、失礼があつたら申し訳ないので、書面に認め、五、六回読んでみて、清子（奥様）に聞いてもらい直して、これで失礼はないだろうかと確かめたのですから、原稿はちゃんと残っているで差し上げましょう」と、やさしくおっしゃられたのであります。

早速地元の方に連絡して、タイプで打って頂き、先生を慕う多くの方々にコピーを差し上げたことでした。

そのうち、何人かの方から、コピーの紙ではそのうち分からなくなってしまうからと話がまとまり、『木綿往生』と題して小冊子にして宮城県民芸協会が発行させていただきました。

その内容は、何度読んでも、人間の生き方の根本が説かれていて、信仰の土台の上に、民芸という「庶民の用に耐え、健康的で美し

い生活用品」を作り、使い、守って行く在り方が、宗教のワクを越えて伝わってくるものがあり、私の座右の本となっているのです。

「木綿往生」、それは木綿のように人生を使い切りましょう、と先生が温かく語りかけてくださる念仏唱名でありましょう。

「書きおろし連載小説」

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々

式子内親王の生涯(第二部)

第九回 残された人々

二十五

夜がまだ開けきらぬその翌日早暁、うすあかりのなかにまだ眠っている京の町を、東山の草庵の庭に立つ法然は見おろしていた。

こんな早くから、朝餽^{あさげ}を炊くらしいけむりがいくつか立ちのぼっているのは、源氏の侍たちの屯所であろう。

西八条や六波羅に屋形をかまえた平家の屋敷跡が、焼野原にかわった姿をさらしているのも見渡せた。

草庵では今、基親父子が帰っていったところである。

法然の朝が早いことを知っている基親は、夜が明けきらぬうちに父とともに草庵をたずね、重衡が南都焼亡の罪を法然に懺悔するゆるしを、八条女院の嘆願によつて法皇が下した、としらせてきたのだ。

早ければ今日の昼まえにも、法然を迎えに義経の使者が草庵をおとずれるだろうという。

「信空」

法然は一步さがったところに立って、同じく京の町をながめている弟子をふり返った。

「三位殿がおられる堀川の御堂は、あれではないかの」

法然が指さすかなたに、信空も視線をむけた。

明け方の空に、一条の煙が立ちのぼり、視線をこらすと、侍たちがたむろしているらしいようすもうかがえる。

「八条南、堀川東でございますから、おそらく、そうでございましょう」

視線をむけたまま信空は答えた。

その堀川の御堂の、すぐかたわらの焼野原が西八条、そして目を東山ぞいの南に転じたところが六波羅である。

かつて平家にあらざれば人にあらざと
傲語した一門が屋敷をつらね、御機嫌う
かがいに参ずる公卿たちの車がひきもき
らずに往来したところである。だが、今
や焼け落ちた瓦礫のあいだをぬって、そ
こは幾万ともしれずに駐屯する源氏の武
士たちの、あるいは屯所となり、あるい
は戦乱で家を失った人々だたむろする、
ホームレスたちのねぐらとなつている。
堀川の御堂から西八条へ、そして東山
ぞいの六波羅へ、と目を転じていった法
然はひとりごとのように、

「現世はすべて夢まぼろしというが、わ
れら末法の世には生をうけた者はみな、
まこと、夢まぼろしの世のさまをみてき
たではないか。いくばくもせぬうちに、
人も世も移りかわつた」

「まことに、師僧の仰せのとおりでこ
います。きびしい世に生をうけました」
低く、呟くように信空は答えた。

早曉の静寂をやぶつて、すぐ北隣りに
ある青蓮院から、僧たちの誦経する声か
きこえてくる。

師と弟子はそのまましばらく誦経の声
に耳をかたむけていたが、

「信空」

目線を眼下のながめにおいたまま、法
然がいった。

「大仏も、大仏殿も尊い」

「はい」

念珠をもつ手を組みあわせたまま、つ
つましく弟子は答えた。

「しかし、人の手が造つたものは、いつ
かは焼失、破損をまぬがれぬ」

「はい」

そういつて弟子は、法然のつぎのこと
ばを待った。

「もとより、南都を焼亡させた三位殿の
罪はかるくはない。しかし、大仏や大仏
殿の造営にまさつて、尊いものがある。

わかるか、信空」

「念仏にございます。念仏にまさる力も、尊いものも、世にあらずと師僧はわれらにお教えくださいました」

「そうだ、念仏よ」

ふり返って信空をみつめる法然の頬に、微笑のかがが宿っている。

「人も世も変り、京の町は一変した。われらはこの乱世に生きる人々に、みだの本願と念仏往生の道をのべつたえねばならぬ。この内乱の世に、希望の灯をともしねば」

草庵への坂道ぞいに咲く春の花の香り、あるかなしかの朝風がはこんできた。

その香りのなかに佇んで、法然と信空は明けゆく京の町に、いつまでも視線をむけていた。

一十六

配下の侍たちをともなうて、直実が草庵の前に立ったのは、同じ日の巳の刻すぎである。そして午の刻には、法然は堀川の御堂の一室で重衡と対座していた。

対面の次第をみまもって同席しているのは義経、弁慶、そして御堂で重衡の警護にあたっている実平ら。

直実も廂にちかいたところに控えている。

捕虜となつて十日、この間、不安と恐怖に責められてきた重衡は、それまでの緊張がとつぜんほぐれたのか、法然の姿をみるやいなや、はっとばかりに小袖で顔をかくして泣きに泣いた。

「南都を焼きはらい、大仏をはじめ諸々の仏像、そして御僧たちをはじめ罪なき老若男女多数を焼き殺しました」

やおら袖から顔をあげた重衡は、法然の前に両手をつくつと、深く頭をさげてその懺悔はじめた。

「地獄に墮ちるは必定なれど、このような私にも仏の救いはありませんか」

「みだの本願があります。念仏による往生の道が約束されております」

落着いた語調で法然は答えた。

「その本願とは何でありましょう」

自分をみつめる法然のまなざしに、深いいたわりがこもっているのを感じながら、必死の思いで重衡はたずねた。

「して、念仏による往生の道とは」

「みだがまだ法蔵菩薩と申しあげたころ、法蔵菩薩は世自在王如来の前で――」

法然は一語一語、かんでふくめるように、あみだ仏の四十八願と、わけても第十八本願について説きはじめた。

重衡はもとより、一座の人々は咳ばらい一つせず、魅入られたように法然をみつめ、そのことばに聞きいつている。

法然が説くほどに、語るほどに、重衡はもはや袖で顔をかくすことも忘れて、

涙を頬につたわらせていた。

「御房は叡山第一の学僧であつた、と聞きおよび申したが、なぜ山をおりられた」

みだの本願をめぐり、法然が説き去り、説き来たるなか、ふと一座に沈黙が落ちた、とそのとき、義経がたずねた。

「叡山では、格別の修行を二十五年の長きにわたつてなされたというが、山をおりて市井の聖となられたのは何ゆえぞ」

「法然は愚鈍の者にございます」

法然は視線を義経にむけて、

「たしかに、一切経をひもとくこと五度の道に迷い、道を求めて長きにわたつて苦しみました。しかし、どこからも光はささず、闇のなかを、寝食もままならぬ歳月をすごしました」

「ほう、御房ほどのお方が」

「そのとき、自力には限りがある、愚鈍の身にして、自力によって往生をなさんとする愚かさ気づいたのです。観経疏

の一文が、私の目をひらせてくれました」

「……」

「いかなる聖者といえども、限りある人間の身なれば、自力で往生をなさんとするは、弓なくして空の鳥をとり、木にのぼらずして高い梢に咲く花を手折ろうとするにひとしいでしょう」

「いかにも、のう」

「念仏他力の道は万人にひらかれた易行の道です。私はこの道をひろく述べつたえるために、山を下りました」

水を打ったような静けさがあたりを配っていた。

と、その静けさの底から、感動の波が重衡へ、義経と弁慶へ、実平へ、そして端ちかくにいる直実のところへも、波紋となつてつたわつてきた。

一七

「三位殿」

そのとき、床に手をついたまま法然のことばに聞きいつていた重衡に、法然はよびかけて、

「南都焼亡の罪、軽くはありません。しかし、いかなる罪にまして、みだの本願の力はつよいのです。この御本願にすがり、ひたすら念仏なされますように」

「ありがたく存じます」ひれ伏して重衡は答えた。

「一度は栄華をきわめられた御身。しかし、今この捕われの憂き目に遭われしました」

法然の胸にも、万感といたいいたさまざまな思いが去来してきた。

道に迷い、道を求めて呻吟しつづけた歳月、そしてとくに、夜明けを迎えたあと今の草庵に住してからは、法然の耳にも目にも、どれほど多くの平家盛大のさまが入ってきたであろう。

清盛の女徳子^{むすめ}の高倉天皇のもとへの入内^{だち}。安徳天皇の誕生。

山城、丹波、摂津、美作、武蔵等々、六十余ヶ国にわかれる日本の国の半分はすべて平家の持ち国になり、一門に所属する公卿、殿上人の数はかずしれず、東山の草庵からでさえ、平家の屋形へ伺候する貴族たちの牛車の列がみわたせた。それが、ここにきてわずか数年のうちに、雲ゆきがあやしくなり、内乱の様相をふかめ、昨春秋には木曾の大軍に追われて西海に落ちていった。

法然にとってさえ、夢をみているのではないか、と思いたくなるような人の世の移りかわりである。

だが、これが人の世なのだ。

浄土ならぬ、人の世の現実なのだ。

やはり万感胸にせまるなかで、法然は語をついだ。

落着いた、静かな語調であった。

「されば、この世は厭わしいところと思ひ捨てになり、ひたすら、浄土を念じなされませ。千人が千人とも、百人が百人とも、いかなる人といえども、みだの本願によって、必ず、必ず往生いたします」

法然は慈愛のこもる深いまなざしで重衡をみつめた。

その法然に、重衡は無言のまま何度もうなずき、涙にかきくれている。

「三位殿」

その重衡をひたみつめて法然は、

「肝要の一事は、みだの本願を信じてわが身を委ねる、このことにつきております。御一緒に、念称十念をとなえて、みだの御力におすがりしましょう」

法然は念珠をもつ手を胸のところにおいて十念をとなえはじめた。

重衡が声をあわせた、と思うや、いつしか念称の声は、義経に、弁慶に、そし

て実平や直実にもひろがっていった。

なむあみだぶつ、みだよ、助け給え。

法然の祈りに和して称える男たちのその声は、一つになって立ちのぼっていった。

一千八

法然が去ったあと、その場にいた人々は、容易にそこを立ち去りかねるおもいで、法然がのこしていった余韻のなかにとりのこされていた。

やがて、

「光でございましたな、御曹司」

弁慶が感動さめやらぬ面持ちで義経に語りかけた。

「東国にも声望たかき僧侶はおりましたが、法然房のごとき御僧を、われらははじめて見ました。そのみ教えもありがたきことながら、御僧のみ姿にわれらは打

たれましたぞ」

(第二部終了)

石丸晶子(いしまるあきこ)

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究科修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝―面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』(人文書院)『お手紙から見る法然さま』(浄土宗出版室)『現代語訳蜻蛉日記』(朝日新聞社)など多数。

連載

雑誌『浄土』を支えた人々

列伝

仏教ルネッサンス再び。珠玉の一冊『念佛読本』執筆者たちの足跡

大野法道上人

宮林昭彦

●大野法音上人

あるとき、夏の暑い日鎌倉大本山光明寺を訪ねたとき、麦藁帽子をかぶり浴衣を端折って草むしりをしている老人の姿が目に入った。ご法主の大野大僧正の在寺を尋ねようと思つて近づくと、法主台下ご自身であられた。

「わしは、草むしりは小僧時代からしているから草むしりをしていると、心が安まるのじやよ」と迎えられた。大野法道大僧正が鎌倉本山に晋董されたのは、昭和二十九年六月である。そのころの堂宇は処々破損し老朽化しており、雨漏りも多く、本山といいながら荒れ寺であつた。しかし、大僧正は「ここは氣候がよく、盆栽を育てるのは楽しみだよ」といわれ、決して愚痴はいわれなかった。

大僧正は晩年も、「人生にはさまざまの嶮所があり、若い時は再びめぐつて来ない。しかし、わしは一生が学生だと信じて生きてきたよ」ともいわれた。いつも柔和なお顔で、話を聞かれるときは「ホーホー」といわれな

がら、決して愚痴を仰せられることなく、良き点のみをとらえて清貧に甘んじ、知足の生活を貫いた一生であられたお姿が尊く偲ばれるのである。

○

大僧正と申し上げるより、小生としては先生としての思い出が強いので、先生としての足跡を辿つてみたい。

先生は明治十六年（一八八三）九月三日に三重県の桑名に出生された。父は建設、母は家で瀬戸物商売を営んでいた。生まれつき蒲柳の質であられた。信仰の厚い土地柄であり、祖母より寺のお弟子になることをすすめられ、松阪の樹敬寺の大野法音師の門に入られた。

大野法音上人は、当時総本山知恩院の山下現有大僧正に次いで、多数の弟子を養われた方である。その数は八十名にのぼるといわれ

る。先生は「師匠は枯れ木も山のにぎわいと言われていましたが、弟子をたくさん育てれば、仏法興隆に尽くすのもでるであろうという意味でした。ご自身は、無妻、菜食、勤儉、持律堅固であられ、弟子の教育に全力をささげられて一生を終えられた方です」と目を細めて往時を懐かしんでおられた。

先生が入山された当時の樹敬寺の様子は松阪の大火で焼けたあとで、本堂もなく仮建物であったが、法音上人は復興の一念に挺身され、弟子達には、一掃除、二勸行で、ことに焼け跡の草むしりの作業にはやかましく、念仏しながら境内の草むしりをし、上人のあとを弟子達が続いたという。先生がのちにその当時の思い出を、「本堂再建の月掛けを檀家を廻って集めた思い出もあるが、自然にそこに寺の生活のあり方をうかがうことができ、このお寺に来て良かったという喜びが、忙し骨の折れる環境に導かれました。寺の規律

正しい生活が、私の体を丈夫にしたと思います。今も暇があると草むしりをしますが、そのときいつも八十年前の師恩の温かさとおおらかさを思い起こしますよ」と微笑みを浮かべて語られた。

○

先生は明治三十二年（一八九九）名古屋の第四教校（のちの東海中学）に入学された。そのとき今岡達音（当時松井）先生に授業をうけ、講本は『有宗七十五法記』であったが、烈々たる講義にひかれ、のちに仏教学研究のきびしさと、進路の扉が開かれた心持ちになったという。

師匠の法音上人の勧めで三年後、上京されて浄土宗高等学院に入られた。明治三十五年（一九〇二）のことである。伝通院の裏にあった、俗に「ブタ小屋」といわれる貧弱な建物であったが、良き師や善き友に恵まれた充

実した時期で、その中のちの林隆碩勸学もおられた。研究科に進学されたころ、そこには著名な島地大等先生がおられ、天台学を学び本格的に学問の道に入られたという。島地先生の学風は宗我にとらわれず、資料を綿密に取り扱い、学問の厳しさとともに、研究者としての態度を教えられた。先生はその後浄土宗の内地留学生として二年間勉強されたのち、島地先生の推挙で明治四十四年（一九一）に天台宗西部大学の講師に就任した。俱舍、唯識、華嚴等の一般仏教教理の講義を担当し、その頃にながむしやに研究活動がなされたようである。

大正五年（一九一六）に望月信亨先生に招かれて、宗教大学教授となられた。担当講座は「円頓戒」であったが、先生は一般仏教や天台学について研究を重ねられたが、必ずしも「円戒」の専門家ではなかった。改めて「円戒」の資料を繙いてみると「円戒」の優

れていることを誇称しているが肝心の円戒そのものの教義や性格が明確ではない。いいかえると円は取り上げられても、戒そのものが見失われてしまっている。戒律という言葉は、中国、日本では一つの術語として扱われ、とくに戒律と言えば、律藏中心に考えられている。しかし本来戒と律は別の言葉で、戒は経藏を貫いているものであって、単に律藏の禁欲條文だけではない。積極的に生きるための心を育てるものである。先生は大乗仏教における戒の本義を明かすために先駆的な研究の立場を鮮明にされたのである。その大著のちに学位論文『大乘戒經の研究』として上梓されたのである。

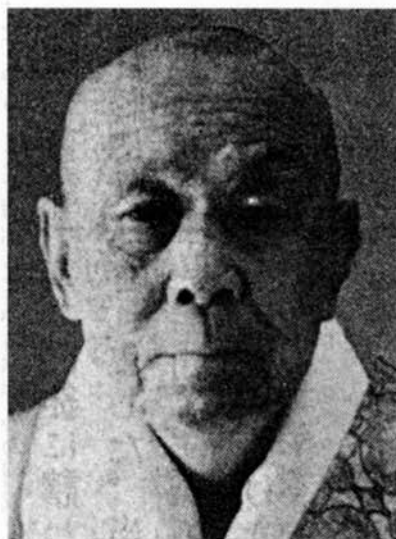
大正十四年（一九二五）、当時の宗教大学と天台宗大学、豊山大学が合同して新生大正大学が誕生した、先生は宗教大学教授から大正大学教授に移行され、教育と研究に昼夜尽瘁されるのであった。あるとき、師匠本音上

人が京都の本山清浄華院の法主になられることとなった。そのため松阪の樹敬寺の住職として先生が嗣ぐはめになった。自身学問を続けたという思いと育てていただいた師匠のあとの法灯を護持しなければならぬということに大変悩まれたという。そのとき樹敬寺の大檀越の原田二郎氏が法道師を松阪に帰することはない、として学問を続けるよう法道上人に申し入れたので、弟弟子が師籍を嗣ぐことになった。「このことをあとで聞いて原田さんも、わたしもそのことは話したことはないが、見えない縁にまもられて、いまの自分があることを実感して感謝で一杯でした」と先生は述懐されておられた。

○

わたしは戦後の混乱期、昭和二十三年（一九四八）頃より仏教学研究室の主任であられた先生より直接ご指導をうけた。研究室の先

生は謹厳実直で、決して無駄なことはいわず、黙々と資料を読み耽る日々で、学生が雑談していると、にこにこしながら「ホーホー」といわれるだけであった。自坊の智願寺で一對一の演習のときも『続高僧伝』をテキストにしながら講ずる姿勢は律師であられた。昭和二十五年（一九五〇）に増上寺執事長に就任され、昭和二十九年（一九五四）には鎌倉大本山光明寺の法主として晋董された。たびたび本山において拝謁をうけたが、生活の姿勢



はかわらず清貧に甘んじておられた。やがて、昭和四十六年（一九七二）に大本山増上寺のご法主になられるがそれは、記主禪師ご入寂の八十九歳であられた。

最後まで、浄土宗の伝法をまちがいに相伝されるお姿、伝書を繕きながら、われわれに質問されるお姿は、真摯にしかも学生のように目をかがやかせて、納得されると、「ホーホー、そうじゃな、そうじゃ」といわれた。

先生の戒名は、貫蓮社徹普通阿であるが、先生はつねに「戒名のようにものごとは貫き通すことがもともと大切だと思う」と仰言っていた。先生は生涯学生求道者の心で清貧に甘んじ、決して不足を言わず悠々と知足の生涯であられた。

昭和六十年（一九八五）十一月二十八日、安祥として浄土往生された。世寿満百二歳。

（大正大学教授・大光院住職）

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

執筆一覽

念佛讀本

念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

石眞大佐中椎
井野野藤村尾
教正法賢辨
道順道順康匡

稲小佐江島笹
垣西藤藤野本
眞存春激愼戒
我祐夫英祥淨

中松梅矢井
野浦原吹川
善眞慶定
英一隆輝慶
（目次登場順）

■申し込み・問い合わせ■
法然上人讀仰会
〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
電話：03-3578-6947/FAX：03-3578-7036

人目をかざらずして、往生の業を相続すれば、自然に三心は具足するなり。

（『乗願上人伝説の詞』）

人目を気にして自身を飾り立てることなく、往生のかなうお念仏を称え続けられ、自ずから三心は具わるのです。

「かたち」と「こころ」

人間の行いを仏教では三つに分ける。一つには「身」によるもの、二つには「口」によるもの、三つには「意」によるもの。総称して「身口意の三業」という。要するに体を使つての行動（身）と言動（口）、そして心での思考（意）ということだ。

ここで身口意の三業が二つにくくれるであろうことが予想される。「かたち」と「ところ」である。

その人の表面に現れ出るもの、つまり身業と口業を「かたち」とし、表面的にはわからない意業を「ところ」とする。

そして、そのどちらを先決とすべきかが論じられることがある。大方は「まず『ところ』をしつかりしなければ何をやってもダメさ」と主張する。「ところ」で考えたこと（意業）がもととなつて、それに順じた身業、口業（かたち）が現出することからすれば確かに正論ではある。

この論に対して法然上人は、念仏を称える際に具えるべき心のありさま——三心——を通して教えてくれる。

阿弥陀仏による救い、浄土への往生を真摯に願って念仏を称える。ここにおいては念仏を称えることが「かたち」に、救い、往生を願う内心が「こころ」に相当しよう。三心とは、その内心が「まこと」の心で（至誠心）、自身のいたらなさをよくわきまえ、阿弥陀仏の救いを深く信じ（深心）、往生を願う（廻向発願心）」ということなのだ、これら三つがすべて具わっていないと往生はかなわない、と説く。その上で口業として現れる念仏（三心具足の念仏）はまことの念仏であろう。つまり、「こころ」と「かたち」が相反することなく、共に「まこと」であることが望まれるのである。

しかし、その二者が裏腹であることが少なくないのが人間である。世の流れを穏やかにするためには、時にはその裏腹も肯んじられる処世方ではあるかもしれないが、上人の説示に反する性を持ってしまっているのが実際の姿なのだ。

だからこそ、なのだろうが、上人は「あくまで三心を具えてから念仏せよ」とは言わない。「三心具足」と「三心を具えてから」と

は以て非なる大きな違いと言わなければなるまい。矛盾のようで矛盾でないのである。

どんな面においても、人間は何が契機となつて「こころ」が確立するかわからない。肉親の死が、一気に揺らぎない信を立たしめることもある。これは信仰におけることだが、他にも、たとえば好きで好きでどうしようもなくその仕事に就いた、というケースもあれば、好きでもなく始めた仕事で、永年を経てもそれなくしては私の人生はなかった、とする談もよく耳にする。

「かたち」と「こころ」。そのいずれを先とすべきかの論に、「いずれでも」の答えを示してくれた法然上人。

「…でなければならぬ」を標榜する割には、それができないジレンマに陥る人間の性を見つめた、上人ならではの明解だ。

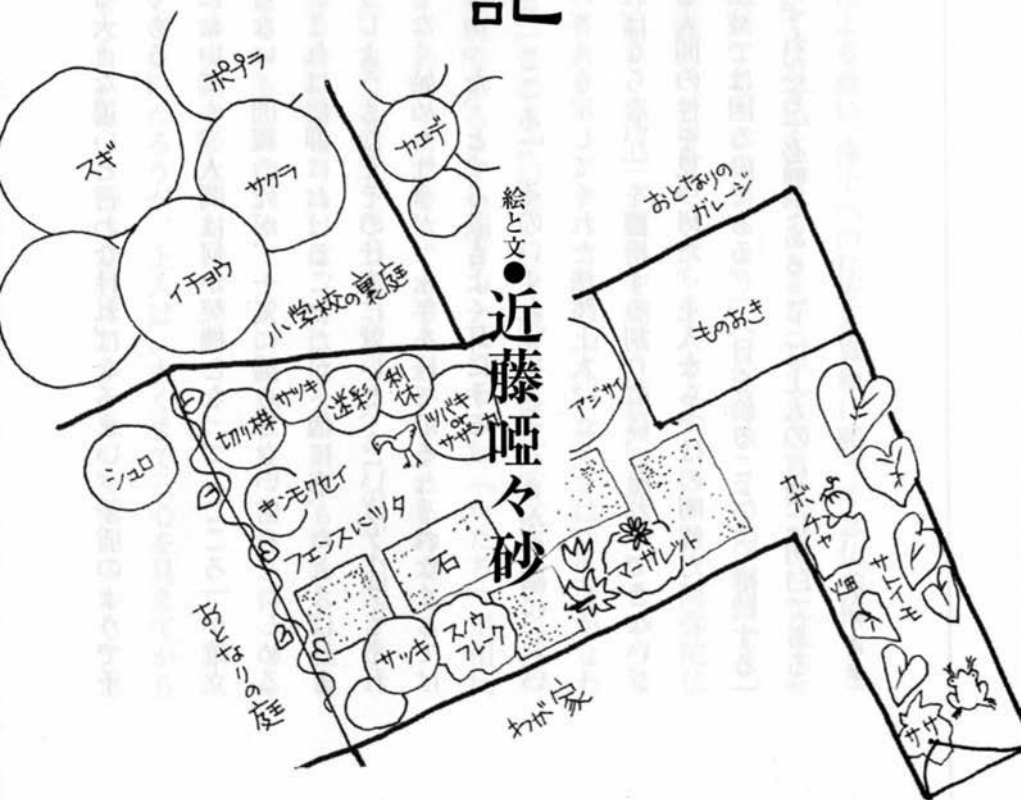
が、いい加減では困るのである。「人目を飾ることなく継続する」謙虚さが「いずれにも」必要であることは上人の言葉に明白である。

(小村正孝)

【月の客】

つぼ庭日記

絵と文 ● 近藤 啞々砂



夏休み、生徒たちのいなくなった小学校の裏庭に蟬時雨が降りそそぎ、入道雲の立ち上った青空を銀色の飛行機が光りながら這ってゆく。二階の窓から見おろす小学校のイチヨウの木の下にはウサギの墓があつて、子どもたちが花を手向けたり、手を合わせたりしていたが、それも今はオシロイバナの群生にうもれて所在もわからなくなった。

黄昏ときには決まって池のあたりで蚊柱が立ち、その生まれたての小宇宙は、何かの決まりに従うように膨張したり収縮したりしながら、人気のない薄闇に消えていった。

畑のカボチャはやつとひとつ実をつけたものの追肥が足りなかったのか、花屋に出る小さな飾りカボチャのサイズのまま、竹の皮を座ぶとんに寝そべっている。残りの一株はつるボケで畑いっぱいに黄色い花を咲かせたが雄花ばかりで実を結ぶことはなかった。

サトイモは熱帯の植物らしく灼熱の太陽を好み、日増しに丈高になった。私はサトイモ

の葉を見るのが楽しみだった。子どももの傘ほどもある大きな葉が幾重にも重り合い、グイグイと延びてゆく。風の日などは、葉がザワザワと大きく揺れ、まさに「芋嵐」の風情だった。炎天下、黒々と影を落して重なり合う葉を見るのも好きだった。

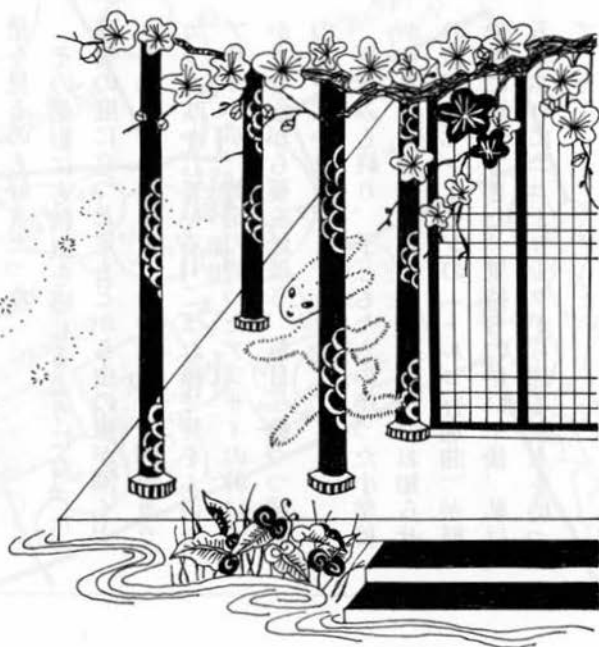
その葉影にも秋気を感じるようになった。残暑の庭に立つと足もとから虫の声が湧くように鳴く。キンモクセイの葉裏で空蟬がカラと吹かれている。こぼれ種で芽をふいたアサガオが、剪定の終わったアジサイの幹にかまりながら蔓を延ばし、毎日一輪つつ紫紺の花を咲かせた。

夏休みも終り、子どもたちの戻った小学校からお昼の放送が聞こえる。何かのお知らせの後、ベートーベンの「トルコ行進曲」が軽やかに流れてきた。気持ちのいい午後、私は五年ぶりにニューヨークから帰る友人を待っていた。

ピンボンの音にドアを開けると、すっかり

キャリアアウーマンになった彼女が立っていた。中国の大連で一ヶ月ほど仕事をして、ニューヨークにもどる途中、一時帰国したという。「お土産の月餅を別送したら行方不明になっちゃった」と、もうそんなトラブルには慣れっこなのか、さして気にもとめない様子で、「かわりに」と小さな鉢を机に置いた。鉢のふちに『月兔耳（げつとじ）』と書いた小さな札が立ててある。月のウサギの耳。その名の通り葉はぶつくりと肉厚でウサギの耳の形をして白いうぶ毛に被われていた。

私たちは、その李白の詩の一片のような名前の愛らしい植物をはさんで、まずお互いの五年間について話し、そして思い出話に耽った。「来年の今頃、私たちどうなってるだろうね」二十年来、私たち二人は会うたび口癖のようにこう言った。「女ひとりニューヨークで暮らすなんて、とても私にはできないわ」と言うと、彼女は「結婚はどちらでもいいけど子どもはほしいのよ」と指で月兔耳のうぶ



毛をなでながら言った。

夕方、仕事帰りに保育園のお迎えに行った夫が息子と賑やかに帰って来た。皆で食事し、遊んだ。彼女は「この子をもらって帰りたい」と何度も何度も息子を抱いた。

私は三日後ニューヨークに帰る彼女のために『月の宮殿で遊ぶウサギ』の絵を描いた。ウサギは四才の息子をモデルにして、二本足で跳ねる様子を描いた。描き上げて、明日渡すその絵を枕元に置いて眠りにつくと夢を見た。絵のウサギが跳ねもせずヒタヒタと歩いてきてベコリとおじぎをした。そして小さな声で「サヨナラ」と言った。ガバと起きると枕は涙の海。本当の息子をあげるわけでもないのに、と夜中ひとり泣き笑いをした。

帰る日が来て、私はその絵といっしょに海苔、梅干し、日本茶と思いつくものを持って彼女を見送りにいった。彼女の乗った飛行機が小さくなっていくのをぼんやり見ていたら、まるでそれが月に帰っていくような気が

してきた。私は狐につままれたようなボカンとした気持ちで、しばらく空を見ていた。

月見が近くなると夜、畑をのぞくのが日課になった。昼間まだ暑い日があっても日が暮れると秋の気配がした。秋草が咲き、虫の音も夏のそれとは違い、澄んだ声が静かにひびいてくる。月明りという訳にはいかないが、秋の燈に照らし出されたサトイモの葉を見ていると心が静まった。星影も涼しく、日増しに肥ってゆく月も美しい。

十五夜の日、ニューヨークから小荷物が届いた。包みをひらくとサーカスのテントのように派手な模様の丸いカンが出てきた。添え状には、彼女の字でお礼と息子にあてた言葉が書かれてあった。カンをあけるとムーンフェイスを型どったビスケットが行儀よく並んでいた。夜、満月を見ながら、家族三人でダンゴではなく、満月ビスケットを食べた。食べても食べても笑った顔の満月がカンの中にぎっしりとあるルナティックな夜だった。



ベートーベン／交響曲第六番「田園」
ブルーノ・ワルター指揮
コロムビア交響楽団

ベートーベン：交響曲第6番
「田園」&第4番
録音1958年ハリウッド
ソニーME ¥1,800 (税込)

色即是空と空即是色
田園第3楽章と第5楽章

直木賞作家にして無類のクラシック好き、宮城谷昌光氏が著かれた『クラシック千夜一曲』という本があります。ここにワルター盤についての興味深い解説がありますので、抜粋し引用させていただきます。

——第三楽章と第五楽章の調和はなにがちがうのか。それは逃避した人間が田園の生氣と息吹のなかで自分を取りもどすことと、いちど死のうとおもった人間がたちなおることのちがいのです——として紀野一義著『「般若心経」講義』(PHP文庫)の言葉を紹介します。——人間というのはむなしい、人の命というのはあてにならない、それがこの世だという認識が最初の「空」です。ところが、つきつめて考えていくと、どうやってもその「空」のなかでしか生きられない自分という存在がはっきりと感じられる。その認識に立って生きていくことが、つぎの「空」になる、ということなのです。『それは大空のごとき広がりである。根源のいのちそのものである。その根源を生きている自分なのだ、と、しみじみありがたくなってゆくのである』もちろん紀野さん自身の考えかたですが、わたしはこれとまったくおなじことを「田園」の第三楽章と第五楽章のちがいで感じたのです——

クラシック千夜一曲
宮城谷昌光・著
集英社新書 ¥680(+税)



シルバー・アンド・ゴールド ニール・ヤング

①再会②シルバー・アンド・
ゴールド③父の面影④バップ
アロー・スプリングフィール
ド・アゲイン⑤ザ・グレイ
ト・ディバイド⑥ホースシェ
ー・マン⑦レッド・サン他全
10曲ワーナーミュージック
¥2,520 (税込)



アコースティックなサウンドで
父の死を切々とうたう



「ハーベスト・ムーン」

「ハーベスト」



60年代後半、戦後世代のまき起こした潮流は、ヨーロッパ、アメリカ、日本と国境を越えて、政治も文化も含んだ大きなうねりとなる。アメリカではこの世代の大統領が誕生しているわけだ。その時代のひとつの象徴として「ウッドストック」という3日間、40万人を集めたコンサートがあった。この出来事は「ウッドストック」という曲になり、クロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤングによってうたわれた。名前を連らねただけのそのバンド名は個々の独立性をいわずもがなに伝える。

ニール・ヤングはバンドとソロの活動を並行して行っているが、その多彩な音楽経歴のなかでも、アコースティックな作品は一本の背骨である。アルバム『ハーベスト』から『ハーベスト・ムーン』を経て、30年を費したアコースティック3部作の最終章。ここで彼は友との再会や、父の面影とその死をうたう。表面的でない慈しみの心情は死を見つめていることと無関係ではない。

彼の音楽、歌を聴いていると、この人にはうたうべき必然があるのだと思わされる。どの曲でもどのアルバムでもそうなのだが、この作品では静かに優しくそれが伝わる。

浄土宗と浄土真宗

寄席や漫才、またはマンガなどで、人が亡くなることをちやかす場面では、必ずといっていいほど、「ナマンダブ、ナマンダブ」と言って笑わせます。

一般的にお念仏と言えはこの「ナマンダブ」と言われてしまいがちです。それほど人々はお念仏が、漢字では「南無阿弥陀仏」という字だということを知っていても、音で聞くお念仏は「ナマンダブ」になっているようです。この「ナマンダブ」と発音するお念仏は、浄土真宗に

限っているといえるでしょう。

浄土真宗では往生するための「行」は、凡夫にかわって阿弥陀仏が修しているとしていますし、「信心」も阿弥陀仏からたまわる真実心のこととしていますから、お念仏を唱えるということとは、阿弥陀仏への感謝の意味となります。いわゆるサンキユウの念仏といわれる由縁です。したがって多く唱えるとか、何回唱えるとかという言い方はまったくありません。

浄土宗では、「ナムアミダブ」

その6 お念仏

と「ツ」を省略することはあっても、それ以上の省略は通常ありません。また「称名念仏」として声を出して唱えることを特に強調し、十念、念仏一会、礼拝念仏、百万遍念仏など、生きているうちの我々の「行」として一遍でも多くの念仏を唱えることを根本とします。いわゆるブリーズの念仏といわれる由縁です。それは「四修」という念仏者の生活態度を定めた教えとしても説かれています。(つづく)

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)384211289

振替001800245231

浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 晩夏光

〈特選〉

晩夏光靴紐たれて子が走る

谷しげ子

走り回って遊んでいるのだろう。靴ひもが
ほども気につかない。そんなことはおか
まいなしで、親に呼ばれるまでは帰らないだ
ろう。この頃外で遊ぶ子をあまり見かけなく
なったが、こういう子を見るのはうれしい。

〈佳作〉

晩夏光風やわらかに物乾く

長尾子浪

油絞浮く運河とろりと晩夏光

細田初枝

名を知らぬ人と挨拶晩夏光

伊藤尚子

● 桃

〈特選〉

白桃やきずつき易き少年期

金谷友江

この頃少年の犯罪がしきりに世間を騒がせ
ており、そのたびに大人はとまどつてしま
う。欲をいえば取り合わせに、もう少し飛躍

選者=増田河郎子

〈特選〉

風鈴に風の漣海の駅

●自由題

〈佳作〉

野仏に供う水蜜桃二つ

嶋田喜代子

桃飾る枕辺退院間近なり

新島美都

挽きたての桃の産毛の香り立つ

石原 新

が欲しいような気もするが、白桃は、少年の
心の傷つきやすさを代弁しているのである。

海からの風に、駅に吊った風鈴が鳴る。さ

ざなみ立つ波のように、風鈴の音も風にさざ
なみ立っていると見るのである。いかにも海
辺の駅にふさわしいとらえ方なのが良い。一
読海風の涼しさが伝わってくる。

〈佳作〉

一陣の風に構えし羽拔鶏

河合富美枝

おにぎりはおかか九月のゆるい風

江森時生

堂涼し寝て見る龍の絵天井

蘭田郁子

小久保草臥

野菊 夜長 自由題

季題

浄土誌上旬会のお知らせ

参加作品 編集部選

晩夏光

晩夏光眠気取りつくオラトリオ

駒ヶ岳追はるるごとく去る晩夏

人影も疎な渚晩夏光

娘といさゝかに言ひあらしむし晩夏かな

みどり児の産毛匂へる晩夏光

全快の夫と歩す道晩夏光

自販機の影伸びてをり晩夏光

船内の料理楽しむ晩夏光

悠々と湾ゆく巨船晩夏光

晩夏光避けて一息椎の幹

風鈴のならずに終る晩夏光

晩夏光路地より消えし老夫婦

翼船のみるみる遠し晩夏光

佐藤雅子

嶋田喜代子

中島一子

山本美代子

河合富美枝

金谷友江

水野公太

石原 新

増田信子

大村和代

加藤政男

江森時生

北川弘子

桃

桃の香や鼻孔にやさし甲斐盆地

行儀よく箱入娘桃姉妹

せせらぎの水冷たかり桃の里

今日忌日白桃供ふ仏前へ

桃洗ふみどり児の肌洗ふごと

桃の地に過ぎし友あり童べ歌

御僧が終の旅立ち桃一つ

水はじき産毛に似たる水蜜桃

仏よりもらいし桃の尻平ら

桃が好きそれより屋根の上が好き

水弾く産毛のいのち夜の桃

かりかりと桃囁むひとの若き額

自由題

トンネルを出るたび揺るる山帽子

去りがたく去るや姥湯の蟬時雨

万霊の途安かれと盆の月

鰯雲静かなる地震過ぎにけり

朱雀門遠くを今に夏の旅

夏草に沈みて見えぬ蝶の影

灯籠を追ふ灯籠の波匂ふ

夏の疲れみじんも見せず僧の背な

門火消えてより燃え上がる思ひかな

窓の外風鈴鳴らす夜の南風

糊固き浴衣着るとき骨が鳴る

父の忌の僧に団扇の風送る

長尾子浪

中島富士子

河合富美枝

上野明達

細田初枝

佐藤雅子

中島一子

浜口佳春

増田信子

数島英恵

永井智宏

伊藤尚子

佐藤雅子

嶋田喜代子

中島一子

長尾子浪

山本美代子

細田初枝

上野明達

金谷友江

中島富士子

木代孝子

小久保すすな

山口信子

締切・十月二十日

発表・『浄土』十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

マンガで楽しい仏教用語 漫画・藤井ひろし

油断

「油断」という言葉は涅槃經に出てくる挿話を源にしています。

王が臣下に命令します。油の入った鉢を持って歩き傾けたりこぼしたりすれば命を断つ、というのです。「断」という言葉と最後の「断」という言葉が合体し出来あがったのです。

つまりあまり軽い意味の言葉ではありません。しかし現在では日常的に使う軽いニュアンスの言葉になってしまいました。たかをくくる。気を許す。注意を怠る。こういった程度のことでも命を失うこともあります。くれぐれも油断大敵。



過去に酔い未来忘れる秋の暮れ 岱潤

ひろさちや氏がまたおもしろいことを書いていらつしました。時間の流れに関して仏教ではちよつと変わった認識があるということです。というのは、普通私たちの物理的な時間の観念では、過去、現在、未来と時間は流れているのですが、仏教では迷っている人間は、過去、未来、現在と時間が流れているということです。インドで作られた仏教書では「過去、未来、現在」の順序で書かれていますし、道元禪師も「去、来、現」と書いているということです。

これはどういうことかというところ、私たちの生活は常に明日のことが気にかかっているということです。現在は過去から規制されると同時に、未来からも規制されているということです。「明日これこれのことがあるから、今日中にこれだけやってしまおう」というのは確かに我々が日常考えることです。古歌に「明日ありと思う心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものは」は有名です。明日のことは仏さまに任せ、物理的時間の観念で考えられるようになりたいものです。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

佐山哲郎

岡川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土

六十六巻 十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十二年九月二十日

発行 平成十二年十月一日

発行人

真野龍海

編集人

宮林昭彦

印刷所 株式会社
シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



民家近し、静かに



足元注意



踏切あり



災害口



故障



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわらない



破れ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

海を見おろす大露天風呂 ホテル「スキラ伊豆赤沢」



海を見おろす眺望の湯「和煦和煦」大露天風呂※ほかにも大露天風呂、屋上展望風呂などをご用意しています。

読者限定ご宿泊優待価格
1名様 1泊2食 13,500円

12月22日までの平日(日～金) 1室2名様以上のご利用(サ込・税別)

- 夕食は季節の山海の幸を使った会席風コース料理 ●朝食は和・洋バイキング料理をご用意。
別料金で刺盛等アラカルト料理がご注文いただけます。

※土曜・休前日、トップシーズンはご利用になれません。(ただし、土曜・休前日で空きがある場合は1名様18,500円の優待料金でご利用になれます。)*ご予約は2カ月前より受付いたします。



現地付近より「スキラ伊豆赤沢」と相模湾を望む。



料理の一例

12/22
までの
限定

秋のゴルフパックプラン

●1泊●1夕食●1プレイ(キャディ含む)

1名様 **24,000円** (サ込・税別)
より
1室4名様利用平日宿泊、平日プレイの場合

長谷工の会員制リゾートホテル

ご予約は「スキラ伊豆赤沢」予約係

※ご予約時に「浄土10月号プラン」とお申し出ください。

TEL. **0557-53-4890** (9:00~17:00)

Homepage <http://www.sukira.co.jp>